

## 日系アメリカ人の個人史をつむぐ —8人のインタビュー記録—

### 6. 加藤雅子（かとうまさこ）さん

#### プロフィール

東京都新宿生まれ。浄土真宗から結婚後日蓮宗になる。すでに亡くなった夫（帰米2世）との間に、子どもは男2人、女2人（長男は日系アメリカ人と結婚、次男はメキシコ人と結婚。長女はフランス人と結婚、次女は独身で自分と一緒に暮らしている）。孫6人。今は毎週木曜日に全米日系人博物館でのボランティアをしている。



#### 夫との出会い、そしてロサンゼルスへ

私の母は、ニューヨーク生まれの長女が3歳で、もう一人の姉が母のお腹にいる時、父の母が病気になったので、滋賀県へ帰りました。父はずっとアメリカにいましたが、戦争中も父からアメリカの話聞いていて、戦争しても日本は負けるだろうと思っていました。アメリカへの憧れが小さい時からあったので、外国へ行きたいと思っていました。父の友人（日系一世）が私の写真をアメリカへ持って行き、今の主人に紹介したのです。主人はお見合いのため日本へ来て、結婚して1956年に二人でアメリカへ来ました。その頃日本は戦後の苦しい時でした。1956年にアラスカ経由でアメリカにやって来て英語ができないので、義理の母がリトル東京でレストランをしていたので夫はレストランを手伝いながらコックの学校へ行っていました。アメリカに来た頃は飛行機もそんなになく、しばらくは日本へ帰りませんでした。父が病気になったので初めて帰りました。日本に帰れない夢をみていた時期もありました。今は3年に1度くらいは帰っていますよ。私は4人の子どもを育てて、子どもが少し大きくなって手が離れたので日系人の人がやっていたフィッシュキングの工場で、退職するまで23年間くらい働きました。500人以上の韓国やメキシコなどから来た英語のできない人が働いていました。

#### 一世、二世、そして三世へ

一世の方が収容所に入ったことをあまり子どもに言わないで亡くなりました。我慢ができたのですね。気の毒なことです。ある人には良かったのかもしれない。収容所のトップの人が寛大な場合もありました。アメリカ収容

所での扱いは寛大で、柵に囲まれてはいましたが自由もありました。そんなに悪くはなかったですよ。でも、これまでの仕事が無くなってしまったり、いつ戦争が終わるか将来が見えない不安があったりして、この点が一番きつかったと思います。私たちの世代であれば、母は日本語で話しかけるが、子どもは英語で返します。日本語学校には行かせているけれど、公立学校がすべて英語なのでこうなるのです。日本に行った時は子どもたちは私に英語で話し、私は日本語で返事をするので皆から面白がられましたよ。

#### 日本の歌・食事

義理のレストランで、日本の歌は良く聞きました。李香蘭、山口よしこ「ここに幸あり」は結婚式のとき今でも必ず歌います。戦争前は軍歌（父がコレクションしていた）をお偉いさんに聞かせていました。戦後は美空ひばりや笠置しずこ。今は、「川の流れのように」。KB ジャパンで日本の歌を聴くことができますよ。昔リトル東京はすごくにぎやかで、短農でお金が入った人がありったけ使って騒いで帰ったりしていたものです。義太夫や三味線もありました。

こちらで市民権を取ったけれど、生活自体はやっぱり日本人。子どもに対しても私たちの世代は日本スタイル。日常にお味噌汁やごはんも食べます。日本食は週に4日くらい食べます。肉やお魚など偏らないように考えています。ひじき、かぼちゃ、肉じゃが、カレーライス、サーモン味噌、茄子味噌、豚豆腐等、お正月にはおせち料理をつくります。

着物は持っているけど娘や孫に着せている。ニセイウィークやお正月、特別なときに着る。

#### アメリカに渡ろうとする日本人へ一言

アメリカは移民国家、それぞれの国から移民してこられた方々のご苦労のお陰で今日があることを頭に入れて現在のあめりかを見て帰ってほしいです。日本人の人だけで固まっちゃう傾向があるので、気を大きく持って、引っ込み思案にならないで、社会に溶け込むように。

インタビュー：2006年8月12日（全米日系人博物館にて、日本語）